

第15回 夏期福音特別集会(鹿沢)(3)

神の奥義——エペソ書第3章——(縮小版40%)

1968年8月24日

小池辰雄

⁵この奥義は、……⁶即ち異邦人が福音によりキリスト・イエスに在りて共に
^{よつぎ}世嗣となり、共に一体となり、

ここが奥義の一つです。ユダヤ人とギリシア人とが一つにされる。

共に約束に与^{あずか}かる者となる事なり。

神の国の約束にあずかる者になった。

¹⁶父その栄光の富にしたがいて、御^{みたま}霊により力をもて汝らの内なる人を強く
し、

御霊によるところの力でもって汝らの内なる人、汝らの一番根源的な人、新次元の人です。「この新次元の人を御霊の力によって強くし」という。キリストの前にただそのまます分を投げ出す。あとは自分の信仰でも力でもない。御霊の助けによって、「主さま!」と叫^よぶ。そこからして、呼ぶ者には必ず答えてくださる。

「汝らの心をいかなるときにも注ぎいだせ」

と。あるがままに自分を投げ出すことがこの「注ぎいだせ」です。「御霊により力をもて汝らの新次元の人を強くし」と言われていますので、何も恐れることはない。どのような苦しい事態も、苦しいままにそこにただ平伏す。そうしたら、必ずその助けがきます。

¹⁷信仰によりてキリストを汝らの心に住まわせ、

「信仰によりて」というのはもちろん、「主さま、あなただけです」ということ。自分の何か
が信仰でも何でもない。あけつぱなしの魂でもって、

キリストを汝らの心に住まわせ、汝らをして愛に根^{もと}ざし、愛を基^{もと}とし、¹⁸凡

ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さの如何^{いかばかり}許^{ゆる}なるかを

悟り、¹⁹その測り知る可^べからざる愛を知^しることを得しめ、凡て神に満てる者

を汝らに満たしめ給わん事を。

これがパウロの切なる祈りです。キリストの愛は何にかかってきたか。幕屋的構造の中の
abcという個はしかし決して孤ならず。真に「神—キリスト—我」となったこの個ならば、
決して孤独の孤ではありえない。必ずこの個は、交わりの流れ、互いに交わるところの「コ
イノニア」に展開する個です。そういう交わりの事態を集会、教会、「召団」という。

神に呼ばれて、呼び出された者がまず個である。そして、これがコイノニアになる。私
たちは何かの集会に入っていて、この集合名詞的な実体を「キリストの体^{からだ}」という。キリ



ストの体としての、有機体としての霊的な、霊化されたところの人格体。切つても切れないところの有機体的な関係になつてゐるもの。それがキリストの体です。

神・キリストの霊がここに立つてゐる。キリストは私たちと同じ水平線に、平面の上に立つてくゞさつてゐる。この神・キリストが大黒柱になつてゐるところの幕屋的(三角垂体)構造です。これが旧約から新約に至るまで「幕屋」という大事な実存体を新約聖書では「教会」という言葉でいわれているわけです。

そういうところの中に入つてきて、ここで救われる。即ち、救いの基もとはこういった群れです。群れの中に入つてきて救われるというのが、今の救いの現実です。ただ本を読んで、救いの世界にはなかなか入れない。もちろん、特殊な人はそれができます。けれども、今の神の召しというものは、「召団」、幕屋的な体的な多であつて、キリストの愛の対象となつてゐるものは、その一つひとつの個であると同時にその群れの全体である。

九十九匹をそつちのけにして、迷える一匹の羊を谷底まで探しに行くといふことは、一つも欠けることのできない全というものに、キリストの愛はかかつてゐる。キリストの愛は即ち、本願の究極のところは人類全体の救済、万人救済にいくけれども、具体的なそういった集まりの存在に顧みがくる。

その全体がまたキリストの大きなエクレシアである。そのひとつひとつの集会というものが、どこの教会であらうとも、それが「聖霊の幕屋」であり、今度は全体としては「キリストの幕屋」であり、それがやがてキリストの日がくると、黙示録でいわれているところの「神の幕屋」ということになる。

それがキリストの愛の対象です。私たちはキリストにそのようにして愛されてゐる。我々一人びとりが絶対なる特殊性を持ったものである。特殊性を持った者に対する顧みというもの、みなそれぞれの内容を持つて、甲に対してキリストは怒ることが、あるときには愛である。乙に対して赦すことが、あるときには愛である。いろいろな表れ方をして、その個に対して愛が表れてゐる。だから、

「その愛の広さ・長さ・高さ・深さの如何いかばかり許ゆるなるか」

という、量りしれないところの愛の内容です。私たち一人びとりの毎日の生活においても、キリストの愛の表れ方は千変万化です。「愛」というひとつの言葉は決して、内容がひとつではない。その表れ方は、「どうしてこんなことをなさるのだらうか。これが神の愛だらうか」と思われることもある。とにかく、キリストの愛は、どれほどその個と、その個の有機体的な体に対して、「キリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さのいかばかりなるか」ということ。私たちはいつも個に対して、また、家庭というひとつの有機体、人格体というものの、一なるところの在り方、それに対するところのキリストの愛を受けとる。

ヨハネ伝7章の終りから8章のところに出てゐる、あの姦淫の女が捕まえられてしまつて、「さあこれを石で打ち殺してよかろうか」と問われたときに、キリストは、



「お前たちの中で石を打てるものは打ってみろ」

と言ったら、みんな逃げて行ってしまった。そして、

「我も汝を罪せず」

とキリストは言われた。キリストはどん底に立つて、これを贖いとつた。キリストは私たちの罪を罪として贖いとる。キリストは罪びとの首^{かしら}となった。私たちのいかなる事態に対しても、キリストはひとつも例外となさらない。全部それを彼は背負った。それが十字架ということ。このキリストの愛というのは、そういった贖いの、徹底的などん底に立つたところの、「その広さ、長さ、高さ、深さのいかにばかりなるか」という、万人に向かって例外なくなさっていくところの愛です。

キリスト教の歴史をみて、いかなる教会も完全無欠な教会はない。我々の幕屋といえども、どこの集会といえども、みな疵^{きず}ものです。その疵ものに対するところのキリストの愛は、ホセヤが示されたところの現実が実は本当の現実の代表である。非常に祝福されたる家庭もあります。また、惨憺たるものもあります。いろんなことがあります。しかし、どのような事態であつても、それが人間の事態であるかぎり、みな完全なるものはひとつもない。「神—キリスト—我」という——その「我」が家庭的な有機体であらうとも、あるいは兄弟としてであらうとも、あるいは集会としてであらうとも——とにかく、人間は真の個ならば、あるひとつの体的なものである。その体がどのような体をもつて現されていくかということにいろいろありますけれども。

今度は有機体的な私たちの問題になる。私たちは京都の集会、信州の石垣会、東京の武蔵野集会、いろいろある。これが一つにこうやって一緒に一年に一回このような大集会をする。これは「神—キリスト—それぞれの集会」というものが単なる「組織」ではない。

パウロが言っているところの教会はもちろん、聖霊の宿った人たちの、切つても切れなところには交わりがある。交わりがないならば、これは聖霊のある世界ではない。その交わりはキリストの愛の交わりである。一人の苦しみを苦しみとして、一人の喜びを喜びとしていくところの、

「傷める^{あし}葦を折ることなく、ほの暗き^{ともしび}灯火を消すことなし」

という、深い思いやりの世界です。本当の思いやりは担いの精神です。担いは、聖霊がなければできない。

この個が聖霊に貫かれれば、どうしても交流が始まって、これが一つの群れとなる。有機体的な群れとなる。私たちが本当にこの三つ、四つの群れが一つの群れとなっている。なんとこれは聖霊の実証ではないかと思つています。私たちは人間としては惨憺たる者です。けれども、その惨憺たる者が聖霊によつては変貌している。その変貌の根源の現実、根源のあなた方一人びとりが決してダメでないというのは、この「聖霊の宿り」ということがはつ



きり言えるわけです。

19 その測り知る可^べからざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給わん事を。

と。パウロは私たちのためにこの祈りをもって今直接に迫ってきています。

32 この奥義は大なり、わが言う所はキリストと教会とを指せるなり。

この群れ、召団、幕屋、集会——何といつてもいい——これがキリストの愛の対象となっている。家庭、大家族の、私たちはその意味において今度は、兄弟姉妹だよね。夫婦というのとはとにかく地的な形態です。兄弟という、また友人という、また先生と弟子という、いろんな関係がある。それぞれの関係がもつとも正しく有機体的に構成されて生きていくためには、どうしてもそこに聖霊がきてなければ、どの関係にしても本当に立たない。

この奥義が、キリストの愛がそのようにかかっている。人間界のいろんな相対的な関係も結局それが絶対的な質をもつて天界に、天的なものになるためにはもう聖霊のほかにない。我々は我々自身をどんなに整えようとしたって整わない。本当の整いというものは、この御霊によって初めてそれがやがて疵なきものとされていく。「個」としてもまた「エクレシア」としても、「栄光より栄光へついにキリストの姿に化する」ところのもの。それは「神の幕屋」となって「新天新地」になる。これは黙示録。ヨハネ伝とヨハネ黙示録は新約聖書の最高のところですよ。しかし、このパウロのエペソ、ピリピ、コロサイはまた別な角度で最高のところを示されている。私はパウロに圧倒されて来た。まず、私たちは御霊に感じなかったら、こんな文字は絶対に響いてこない。

「圧倒」ということで、ダンテの『神曲』の中の一句を引用しておきましょう。

「天国は熱き愛より、また神の意志を圧倒する活ける望みより強襲を受ける。」

これはマタイ伝11章12節の、

「激しく攻めるものが天国を奪う」

なんていう言葉があったでしょ。それをダンテがここにもってきた。

「人が人を征服するごとくにあらで、天国は圧倒せられんことを願い、圧倒せられつつ、

おのが恵み、慈愛によって圧倒する。」

という、おもしろい言葉がある。即ち我々は天国に向かって、天的な現実に対してこれを何とかして突撃して天国を奪いとり、その中に本当に突入、突撃しましょうという、その我々の側の突撃、もの凄い圧倒的な願いを今度は逆に、それによって圧倒されようと、そのような願いを神さまは喜ぶ。キリストの祈りのところにもあります。「お前たち、しつこく祈れ」なんていうところもある。そうかとおもうと、「簡単に祈れ」と言ってみたり。波状的に祈れと。しかし、その力を逆に利用して、「神さまは今度は恵みをもってお前たちを圧倒するぞ」と。私たちが本当に祈りの世界でもって、神の本願に圧倒されるときに、本願を本当に受けるときに、私たちはこの聖霊の世界に本当に入っていく。

